
居場所探しの旅

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居場所探しの旅

【Nコード】

N8978X

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

呪われし者として、生まれてしまった未癒。未癒は、自分の居場所を見つけて、平穩に生きることができるのか？

家出

—— 四年前。それは、私にとっての最後の幸せだった。

「ねえ？おかーさん、まほうおしえて？」

「えっ？魔法？いいわよ」

ここで、母が横に首を振っていたら——。そんな考えが、脳裏に描かれる。

「魔法は、空気中の魔気を、集めてその魔気に、お願いするの。こんな風に。」

「……火よ、私の明かりとなり、わが道を照らしたまえ！……」

母の手には、拳一個分ぐらいの大きさの火の玉が現れていた。

「わー、おかーさんすごい」

「そう？この呪文は、自分の想いを言うことで発動するから、呪文は、最低なくても平気よ。でも、魔力っていうのがあって、その人の中に、どれだけ魔気が集まるかっていう、磁石みたいなもの、ね。その、魔力の量しか魔気は集まらないの」

「むずかしくて、わからないよ。おかあさん」

「そう？一応、やってみれば？」

「うん！……ひよ、われのあかりとなり、わがみちをてらしたまえ！……」

私の手には、白い炎が現れる。

「これは？未癒！すぐ炎を消しなさい！……水よ！……
……！？何で？何で消えないの？まさか、私の魔力が、この子より弱いってこと？」

何も、起こらなかった。否、水が一瞬で蒸発した。刹那、魔気が暴走し、辺り一帯に、白の炎が点火した。炎は、中心に居た私を残し、周囲を燃やした。灰しか残らなかった。母も、他の人も。

「おかーさん？どこ？どこにいるの？」

私は、母の遺体である灰を踏んで外へでた。すると、微かに音がした。耳を澄ます。馬が走る音だ。その音は、着実に近づいてきた。

「おい、何が起きたんだ？」

「あのね、わたしがまほうをつかったらね、みんななくなっちゃったの。どうして？お、おかあ、さん、どこ？おいていかないで、わるいことしてないのに……」

私は、泣いてしまった。この時の私は、皆を殺したとは、気付けなかったから母がいなくなっちゃったことに、ひたすら泣いた。

「呪われし者か。しかし、数百年は記録に残っている限り生まれていない。何故だ？」

騎士団長の声は、徐々に小さくなっていく。私は、最初の、呪われし者、という言葉しか耳に入らなかった。そのことが、話をややこしくしたのかもしれない。

「俺の家に来るか？」

「いやだ。だって、わたしをもるもつとにしようとしているんですよ？のろわれしものっていつていたの、きこえたんだから」

「モルモット？そんなことはしないよ」

それに、と騎士団長は話を続けた。その声は、さつきより厳しくなっていた。

「ここに居たら、君は、不幸になる」

「ほんとう？」

その言葉は、私の着いていかない宣言を、軽く覆した。

「ああ、本当だ」

肯定の返事。

「じゃあ、おじさんについていく」

と、私は答えた。

「おじ……俺のことは、騎士団長と呼べ」

俺、そんなに老けているか？と、騎士団長は呟いている。

「はい、きしだんちょう」

騎士団長は、満足げに目を細めた。

「じゃあ、着いてきな」

「うん！」

ありがとうございます。私は、自分の居場所を見つけるために、旅に出ます。三日に一度は、連絡するつもりです。連絡がなかった場合、命の危機か、死亡しているので、心配は、そのときだけしてください。未癒。

何か問題がありすぎの手紙のようがするが、気にしない。よし。転移と、私が呟くと、私は、村の門の前にいた。

「よし、歩くぞー！」

なぜか、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。そろり、と後ろを振り向くと、そこには大きなライオンがいた。

「なーんだ。ビッグキャットか。驚かせないでよ。って、逃げなきゃっ！」

ノリ突っ込みなんてしている暇ないよっ！……まあ、していたけどさ。

「追いつかれたっ！？」……まあ、足の速さがねえ……
……諦めている暇なんてないよっ！

「……炎よ、我が手先となり、燃やしつくせ！……
」

赤い炎が、相手を燃やす。金になる部位だけ、残しておいた。今回の場合は牙と肉。大きな猫、か。前から思っていたけど、この名前を考えた人だれ？まあネコ科だけどさ、ネーミングセンスないでしょ。

まあ、過去の人に失礼か。先祖だもんな。まあ、それはさておき、どっちの道に行こうか。個人的には、左がいいような気がする。でも、右もいいかも。よし、棒が倒れた方に行こう。後ろ？引き返してこと？無理でしょ。じゃ、もう一回。前？樹海に進めって？

虫がいつぱいいるから嫌だ。左？よし、左に行こう。

現在、悲鳴が聞こえています。よし、間に合わないね。無視しよう。しばらく進むと、死体があった。手を重ねて、祈る。

「ご愁傷様です」

助けに行けなかったが、ご冥福を。

よし、寝よう。

「……空間よ、私の前に開き、我を招き入れよ……」

空間が、私の寝室を作ってくれる。ちなみに、この中に私の荷物も入っていたりする。

「朝か、うん。起きよう」朝はやっぱり、朝風呂の後に牛乳だよねっ！

「魔物でも狩って、飯にするか」

善は急げ、だ。さっさと狩りに行こう。草の間から覗いていると、ゼラチンみたいなものでできている魔物を見つけた。あれは、食べないからいいや。他の——いた。争っている。このまま待っていれば、漁夫の利である。あれ？なんかこっちを向いたような気がする。よし、気のせいだ。まあ、現実逃避はここまでにして……

。はい。今、私逃げています。そうさ、烈火のごとく走るのさ。

「ちっ、しかたない。殺ってやる。ちくしょー、私の漁夫の利作戦が……」

私の手間を取らせたな？

「……風よ！刃となりて、切り刻め……」

私の前に、スプラッタな光景がある。やった奴はひどい奴だ。……私だけど。というわけで、私の旅の二日目は、終わったのであります。

家出（後書き）

読んだり見たりしてくださる方、ありがとうございました。

衝突（前書き）

遅れた・・・。

すいませんしたっ！

・・・見てくれている人がいたらですけど・・・。

衝突

私が、家を出て1カ月と二日がたった。町だ。かなり大きい。首が痛くなるような高い壁に、小さな門が（危険なものをできるだけ入れないようにするためだろう）ある。そのアンバランスさには、少し笑える。しかし、大きすぎる。私は、この町についての説明が書いてある掲示板を見ながら思った。

新たな居場所を探すにあたって、これほど大きな町は論外だ。人の多さゆえ、個人を見てくれない。この人は、冒険者だからこの枠、この人は、商人だからこの枠、という風に枠に押し込んでしまう。

——私が呪われし者だと知られてしまったら、おそらく昔より扱いが酷くなるだろう。しかし、情報は大事だ。私の、良い居場所で楽をする作戦にあたって、大きなステータスとなるだろう。とりあえず、この町のギルドに行って依頼を受けようと思う。

結果……簡単だった。ここの依頼は、私の故郷より魔物の強さが遥かに劣る。ぼろ儲けできた。3日間で約1000万円。一日に330万ぐらいの計算になる。これで、軍資金は手に入った。なにか、良い物はないかな。

本が欲しいと思った。書店に寄ろうと決め、私は歩きだした。書店に入ると、中は宝の山だった。もう、籠がいっぱいだ。新しい籠を取ろうとした。が、一冊の本に目移りした。古びた外装からは想像できないような魔気を感じた。大陸中の魔気を凝縮したような、禍々しい。そう思った。ちらつと値段を見ると、一冊、1000万。

——は？高いよ？うん、非常に。頭が、混乱してきた。3日で稼いだ私が言うことじゃないけどさ。

「すいませーん！店長さん居ますか？」

「はい、今行くよ」

しゃがれた声が返ってきた。

「なんで、この本はこんなに高いんですか？」

「この本は、昔の魔道書だからね」

！？魔道書？あの、都市伝説になっている？持った人は殺されるってやつ？

「魔道書？本当ですか？」

「ああ、嘘を言っただけに何のメリットがあるのさ」

「高い本を買わせて実は紙きれで、1000万ぼったくる、とか？」

老婆は、私の回答に満足したようで、豪快に笑った。

「まあ、その可能性は捨てきれないな。騙されたと思って買って見たらどうだい？」

「1000万も騙される、と？」

「まあ、こつちの本の会計をするから、その本を買うかどうか決めればどうだい？」

そう言つと、老婆は算盤そろばんを弾き出した。しかたない、籠に入っている分は、魔物の部位を売った分で払うか。終わった見たいだ。

「終わったよ。67万だ。さつさと払いな」

1070万を、レジに置く。

「おお、姉ちゃん金持ちだね」

こんな大金見たことがないよ、と言いながら金を数え始めた。数分後に数え終えた老婆は、本を渡してきた。それを、空間魔法を使って、しまつ。老婆が何かを言いたそうにしていたため、こういった。

「さつきの3万は口止め料。貴方意外に知っている人はいないから、町に噂が広がったら、貴方を……」

指を鳴らす。すると、光と闇の龍が現れる。

「殺しにいくわ」

また指を鳴らすと、龍は空気に溶けていった。

「あんたは、敵に回したくないねえ」

老婆は、くつくつと笑いながら言った。

書店を出ると、すでに町は暗かった。親切な荒れくれ者からお金

を恵んでもらおうと思い、裏道を通ると、出来ました！恐喝者の山が！ちなみに、全員パンツ以外持っていない。全部、恵んでいた。臨時収入が、100万ほど。嬉しい！私、やったね！それはさておき、宿に戻り、寝ようかと考えた。そう、考えた。考えた。うん、3回目。大事だもん。私の安眠を邪魔する大魔王（またの名を勇者と言う）が現れたのだ。とりあえず、殴った上で、死刑だ。私刑じゃなくて。うん。

「それでは、被告人よ、何か言い残すことはないか？」

「何で、いきなり殺されなくちゃいけないんですか？ノックもしましたし」

女の声だ。

「それでは、処刑を結構します」

「無視？無視なの？」

変わらず、女の声だ。

「じゃあ、3、2、1——」

「ちよいちよいちよい！待つて——」

想像がつくと思うが女の声だ。

「うむ？何だい？被告人？」

「何で私刑何ですか？」

完璧に女の声だ。

「大帝国憲法第一条の一項目に書いてある。私の安眠を阻止した生物は、死刑と書いてある」

「なにそれ？やめてくださいよ」

もう言いたくないが女の声である。……うん、もう止めるよ。

「妖精？」

親切にお話を聞いてあげたら、妖精だという。

「ええ、私の話を聞いてください」

特に人間と変わった所はない。

「嫌だ」

だつて面倒くさそうだもん。

「じゃあ、・・・・・・・・えっ？嫌だ？何ですか？」

「厄介事でしょ？どうせ」

「まあ、そうですが」

何のことだろう、聞いてみても良いかもしれない。

「その本を、譲って欲しいのです！」

あ、何だそんなこと？

え？いいよ、そんなことなら

「もちろん、お礼はします・・・・・・・・いいっ！？いいって言いました？」

「うん、もう暗記したし」

帰りながら読んだもん。

「あの量を、あの時間で？」

「あの時間？何故知っている？まさかお前？」

指を鳴らして魔法を自称妖精に使う。すると、見る見るうちに老婆へと姿を変えた。うん、やっぱり処刑だ。処刑！処刑！はっ！テンションがおかしいことになってしまった。

「気付かれたか、やっぱりあんたは、敵に回すべきじゃなかったねえ。でも、金のためなら私は何でもするよっ！・・・・・・・・落雷よ！この者に裁きを・・・・・・・・」

「裁きつて、貴方が受けるべきよ！・・・・・・・・落雷よ！この者に裁きを・・・・・・・・」

二つの雷が、空中で衝突した。

衝突（後書き）

うん。テンションがおかしいです。ちなみに老婆は、名前はまだない。これからずっとない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8978x/>

居場所探しの旅

2011年10月26日08時15分発行